

## 進捗状況の概要

本取組の目的は、大きく(1)アクティブ・ラーニングの活性化と(2)学修成果の可視化システムの構築である。この目的のため、いくつかの課題を設定し、全教員で分担して実施してきた。以下、これまでの取り組みの概要を記す。

### (1)アクティブ・ラーニングの活性化

本学の既存のライフデザインプロフェSSIONAL各分野だけでなく、「読み・書き」分野、「伝統文化」分野などにおいても、アクティブ・ラーニング型授業を取り入れ、カリキュラムを開発することができた。アクティブ・ラーニングの活性化を保障するための仕組みとして導入を計画していたアクティブ・ラーニング・マスター制度については、当初は個々の教員のアクティブ・ラーニングのスキルを測る基準のようなものをイメージしていたが、「アクティブ・ラーニングを、『能力に応じて』導入する段階から『必要に応じて』導入する段階へ高め、内容のみならず、教授法のバランスも考慮した、カリキュラムの全面的体系化」という目的からすると、教員個人レベルにとどまる制度では不十分であるという結論に至った。そこで、個人レベルでの制度と組織レベルでの制度の2つを一体化し、さらにめざす目標を常にスパイラルアップする仕組みもパッケージ化した。現在おおよそその制度設計が済み、平成28年度中に詳細設計が固まる予定である。

### (2)学修成果の可視化

#### ①ディプロマポリシーを核とした達成度評価

##### a.ミドルレベル・ディプロマポリシーの設定

まず必要なのは、多様な分野から構成されている本学科における効果的な到達目標の設定だった。従来、学科で1セットのディプロマポリシーを設定していたが、これではどうしても全分野を考慮して平準なものとなり、各分野の特徴を取りこぼすこととなっていた。そこで、分野ごとに到達目標を設定した。これを、従来の学科のディプロマポリシーの下にある分野のディプロマポリシーの意味を持つことからミドルレベル・ディプロマポリシーと呼んでいる。平成27年度に、学科内にプロジェクトを作り全教員の意見を反映させつつ、ミドルレベル・ディプロマポリシーを設定した。

##### b.総合的評価提示システムの構築

ディプロマポリシーを核とした達成度評価の中心となるのが総合的評価提示システムである。これは①科目の点数だけでなく到達目標も評価、②科目だけでなく、ディプロマポリシー/ミドルレベル・ディプロマポリシーも定量的に評価、③教員だけでなく学生も自己評価、という評価の3つの拡大を行うためのシステムである。平成27年度にシステム構築が終わり、10数科目に対して試験運用を行った。今後出力のテスト等を行い、平成28年度以降の本格運用に向けて準備していく。

#### ②外部評価

外部の社会人基礎力テストとしてリアセック社のPROGを実施し、GPAとの相関分析に加え、平成27年度1年生に対しては、高校生時のアクティブ・ラーニングの体験度との相関分析を行った。また、平成26年度2月に小規模な予備的卒業生インタビューを行った。小規模だったにも関わらず、ロングレンジでの学修成果の可視化が、在学生対象のショートレンジの学修成果とはまた異なる、有効な情報を与えることがわかった。この予備的調査を踏まえ平成27年11月に本格的な卒業生インタビューを実施した。

#### ③FD活動

授業改善の方法としてミッドターム・スチューデント・フィードバック(MSF)法の導入を考えたが、ワークショップを行う中で、そのままの形での導入は難しいことが判明した。そこで、本学の実情にふさわしい効果的なMSF法のアレンジを検討した。また、学生FD活動は活発に展開した。ここでの学生FDは大学教員の教育能力開発という意味ではもちろんなく、「みんなで大学をよくしよう。その中で自分たちも成長しよう」ということを目的にしたものである。学生の主体的学びの強化に欠かせない要素として重視している。おおよそ1~2割の学生を組織して、1年を通して活動を行った。